

# 名古屋柳城短期大学 子ども文化と紙芝居プロジェクト

実行委員長 鬢櫛 久美子

## はじめに

今年で、109年の歴史を持つ本学の図書館には、2000点余の紙芝居が所蔵されています。そして、これらの紙芝居を、学生も卒業生も、とてもよく利用しています。本学図書委員会は、保育における紙芝居の役割を認め、紙芝居貸し出しサービス向上、保育紙芝居の収集と保存、紙芝居の目録情報を整理しデータベース化する等の図書館の取り組みを以前からサポートしてきました。これまでの活動をさらに強化し、保育紙芝居の学術研究を進めて、紙芝居の情報センターを目指そうと、2005年度「子ども文化と紙芝居プロジェクト」を以下の4つのコンセプトを柱に立ち上げました。

「紙芝居」を通して子ども文化を考える

「紙芝居」というメディアを後世に残す

「紙芝居」を通して共感の輪をつなぐ

「紙芝居」というメディアを再構成する

1年間の準備期間を経て、2006年度は、「テレビのなかった時代に子どもたちの目を輝かせたメディア」、2007年度は、「子どもと紙芝居が出会うとき」というテーマを掲げ、活動の充実、展開を図ってきました。具体的には、1. 保育紙芝居の研究、2. 紙芝居の読み聞かせ振興、3. 「紙芝居・ネット」の構築、4. 手作り紙芝居コンテストといった活動を展開しました。

## 保育紙芝居の研究

紙芝居は、街頭紙芝居として誕生し、大衆文化、児童文化の中で育った文化財です。今日では、保育の場で積極的に活用されていますが、その他のところではあまり見かけないものとなっています。最近の情報メディアの急速な進化とともに、単純で人間味のある紙芝居が見直されてきていることも事実ですが、まだまだ、一般化しているとはいえません。街頭紙芝居時代に根付いた大衆的なイメージと、戦争協力に利用された歴史を持つために、教育メディアとして十分な研究がされることも、また十分に評価されることもなく今日に

至っています。プロジェクトでは、紙芝居がどのようにして保育の中に取り入れられ、保育メディアとして位置づけられてきたのかを明らかにし、保育現場での活用の現状調査をするとともに、保育教材・教具としての有用性についての研究を進めたいと考えています。そして、メディアの進歩に伴う子どもの変容に対して、紙芝居の有効活用を見出したいと考えています。

2005年度には、紙芝居の歴史を概観することで保育史との接点を検討し、保育界では倉橋惣三、副島ハマらが、紙芝居というメディアに注目し保育実践に取り入れていたことを明らかにしました。

2006年度は倉橋惣三に焦点を当て、保育と紙芝居の関係を探ってみました。日本紙芝居協会の発行した雑誌『紙芝居』を、国内で所蔵が確認できた範囲で調査し、掲載された言説を検討しました。倉橋が紙芝居の持つメッセージ力の強さよりも、教育メディアとしての有用性に注目していることが見て取れ、大変興味深いものを感じました。

2007年度は福音紙芝居と保育の関わりを研究しました。今井よねの福音紙芝居活動が紙芝居の教育的な活用の契機となったことは良く知られていますが、戦後の福音紙芝居活動についてはほとんど記録がありません。本研究により、聖公会信徒関屋友彦が今井の後継者であることが明らかとなり、学校教育から紙芝居が教材として締め出された後も幼児教育の場では紙芝居が活用され続けていることに大きな貢献をした人物として浮かび上がってきました。

以上の紙芝居に関する研究成果は、日本子ども社会学会において発表すると同時に、本学研究紀要に発表してきました。（『名古屋柳城短期大学研究紀要』第27号から29号掲載）

今年度は、研究紀要で特集を組み、本学教員にそれぞれの専門分野から紙芝居について投稿をもらおうこととしました。

## 紙芝居の読み聞かせ振興

紙芝居の魅力を伝えるために、幼い子どもとその保護者に対して、また、保育・幼児教育現場の指導者に対して、紙芝居の作家・実演家・研究者がさまざまな形で、紙芝居の楽しみ方と具体的な活用法を伝えていくことを目的とした取り組みです。

夏休み中に本学の附属園で、それぞれの地域の2、3歳児から児童までとその保護者を対象に紙芝居の実演を行いました。

2006年10月15日には、フォーラム「紙芝居の魅力と演じ方」を開催しました。午前は、シンポジウム「保育と紙芝居」を実施しました。シンポジストは、東京家政大学名誉教授の阿部明子先生、声優、紙芝居研究家の右手和子先生、京都学園大学教授堀田穰先生、本学附属柳城幼稚園園長の中野早苗先生でした。子どもの文化研究所の協力により、幼児紙芝居の創始者、高橋五山の代表作の展示もしました。午後は、実演講座「紙芝居の上手な演じ方」と題して、右手和子先生に実演と指導をしていただきました。

2007年12月1日には、「手づくり紙芝居の作り方」と題するフォーラムを開催しました。前半は、「紙芝居の魅力—子どもと紙芝居が出会うとき—」と題して対談を行いました。対談者は、絵本・紙芝居作家の長野ヒデ子先生、京都学園大学教授堀田穰先生、本学教授奥美佐子先生です。後半は、長野ヒデ子先生に講座「手作り紙芝居を楽しもう」を実施していただきました。

## 「紙芝居・ネット」の構築

2007年4月に、紙芝居に関する情報をインターネットで発信していくサイトを公開しました。「紙芝居を楽しむ」、「紙芝居を知る」、「紙芝居を演じる」、「紙芝居を作る」、「紙芝居を探す」、「紙芝居を守る」という6つのテーマで構成されています。パソコンの画面上で昭和初期の街頭紙芝居の様子や、貴重な紙芝居を見ていただくことができます。

## 「紙芝居を楽しむ」

デジタル紙芝居ギャラリーと、実演ライブの2つのコンテンツから成り立っています。デジタル

紙芝居ギャラリーには、著作権処理の済んだ作品を公開しています。関屋友彦先生の「靴屋のマルチン」もご覧いただけます。実演ライブには、昭和の街頭紙芝居全盛期の実演場面が再現されています。

## 「紙芝居を演じる」

2006年のフォーラムの実演講座での、右手和子先生のご指導の様子を撮影したものを基に掲載しています。さらに、右手先生に本学附属柳城幼稚園の園児の前で実演していただいた様子を、掲載する準備も進めています。

## 「紙芝居を探す」

本学の2000余の紙芝居の検索ができます。

## 「紙芝居を守る」

紙芝居は材質の問題を抱えています。長く保存するためには、対策、修理が必要です。これらの情報を発信しています。

## 手作り紙芝居コンテスト

子どもが作成した紙芝居を募集しました。78作品の応募があり審査した結果、最優秀賞1点、優秀賞2点が決定しました。3作品は、フォーラム会場で表彰し、ネット上でもデジタル紙芝居として公開します。優秀な作品は印刷紙芝居にもします。

## おわりに

この2年間、プロジェクトは、独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」の助成を受け活動をしています。文部科学省からは、大学経営強化の事例として取り上げられ評価されました。歴史ある保育者養成機関として、保育・幼児教育に紙芝居の情報センターとしての役割を担っていくべく、これからも活動を展開していきたいと考えています。